







時に収めた『記憶の固執』もある。詩集『長崎碇泊所にて』は詩作活動の独立した達成だが、これに先立つ『長崎原爆・論集』とを併読すれば、彼の詩をより広い空間に俯瞰できる。しかし、新聞はじめジャーナリズムはもっぱら彼の尖鋭な物言いに注目し、核大国の核実験時や毎年八月六日・九日の原爆記念イベントにのぞんでの格好のコメンテーターとして彼を「利用」してきた。じつ、新聞やテレビの期待どおり彼は状況へ正確に刺さる発言をしたし、底の浅いカンパニアと知りつつ反核サークルの機関誌などの需めにも辛抱強く応じてきた。その結果、山田の内部に埃のように降り積もった疲労や無力感などには、だれも注意を払っていない。まして、やけに冷えこむ夕暮れ（こんなときは／おうどんのたべたかねエ（おうどん））とひびく少女の透明な声を聞きとめた詩など、正面から評価することも少ない。山田の本来は詩人であり、『長崎碇泊所にて』はその最新の達成である。

新世紀へ至る十年ほど前から、世界と日本の戦後史は大きく転回し、傾きはじめた。ソ連と、ソ連を中核とした社会主義世界体制が崩壊した。八月六日・九日に旗差物をふりかざして行進する〈炎天下社会党 炎天下共産党〉も急速に影が薄くなった。ニューヨークの貿易センタービルへのテロは、パクス・アメリカーナの綻びと同時に、テロリストの背中を押す闇の巨大さをも映し出

した。地球環境破壊。環境難民。食糧不足と人口増大。環境汚染。核だけでなく、どの問題もそれぞれが人類滅亡への十分な可能性をはらんでいる。核戦争阻止に集中できた過去とちがいで、二十一世紀はこれらののっぴきならない危機の複合をもって特徴づけられよう。社会主義革命の旗をおろした炎天下革命党こそまさに涙ぐましいかぎりだが、それ自身また一年先さえ見えない政治の闇の一部を構成している。そうこうしているうち、へいつしか老いが正面立ちにきてしまった／地軸が何十回となく正確に公転したから／おれのせいではないが生理の所為だ（残りの夏）。こうした山田かんの焦りや不安は、竹山の「射祷」と共振して読む者を打つ。山田の場合、もう一つ負担になるのは、地軸の公転や生理の所為ではなく、まさに病理の所為で肺と胃を撃ち抜かれていくことだ。

一八二五年のデカブリストたちには、まだしも希望があった。いまや日暮れて道遠し。いや、闇に充ち満ちながら道などないのが二十一世紀こんにちただいまの現実にはほかならない。闇を透視し続ける表現者も、「智慧の悲しみ」を悲しみつつ在るほかに、いま生きるすべはないのだ。在るしかない。これをしもペシミズムというなら、毒をきかせた現代の詩の食卓につく資格はだれにもない。